

リ・モンスター
Re:Monster
金斬兇狐 Kanokiru Kōketsuno
9

《三百四十一日目》

【聖戦】当日、普段と変わらず世界を照らす太陽が昇った。

それに合わせ、俺——オバ朗が持つ生産系アビリティの一つ、【大悪魔精製】を使って精製した道化師の悪魔^{ドエロニククデイモン}を、使者として送り出す。

白い顔面に奇奇怪怪な化粧^{ききかいがい}を施し、大きな赤鼻と過剰なまでの装飾が付いた衣服を纏う小太りの悪魔は、背中に生えた翼^{つばさ}で羽ばたき、ここ【鬼哭神火山^{きこくしんかざん}】と外界を隔てる【境界圏^{ホーダーリース}】まで飛んでいく。その近くに、《ルーメン聖王国^{せいおうこく}》を中心として結成された人間の連合軍と、《アタラクア魔帝国^{まていこく}》と《エストグラン獣王国^{じゅうおうこく}》の【帝王^{ミゼイアン}】達が率いる魔人と獣人の同盟軍がそれぞれ、陣を構えていた。

最初はどちらの陣営も問答無用で撃ち落としてきた。どうやら敵襲だと思われたらしい。

手が早過ぎるだろ、と思わなくもないが、事情を知らないならば仕方ない、と納得はできた。

なので、二体目には白旗を持たせて送ったら、今度は攻撃されなかった。

もつとも、『世界の宿敵』に選ばれし我が主様は、最奥にて待つて二ヨロー。幾つかの試練を越えれば我が主様の下までイケルニヨローンパ。我が主様は寛大な御心で待つて居られるのだからお前等は早く殺されにいくべきニヤモン』と、ヒトを小馬鹿にしたような口調での伝言を終えた瞬間に惨殺されたが。

とはいえ、この【聖戦】の目的地を示すマジックアイテム【導きのコンパス】をドロップしているもので、役割は果たしている。

ともかく、話を聞いた二つの陣営は、早朝から早速侵攻を開始した。

非戦闘員が全て撤収した事で総数は減っているものの、それでも戦力は豊富だ。最終的に【鬼哭神火山】に足を踏み入れた者達について、名前などをちよつと詳しく説明しておく――

『連合軍』

《ルーメン聖王国》所属。

【白き誕辰なる救世主】アンナリーゼ・ディナ・エインズ・ルーメン、改め『白主』。十代後半の聖王国王女。【神器】持ち。ちよつと頭がおかしい、今【聖戦】では最も注意すべき存在。

【境界の聖人】イーシエル・ヴォルフシュ・サーズ、改め『界聖』。聖王国貴族出身。女性であり

ながら、全身を隠せるほど大きな金属盾の【神器】である【境界神之魂盾】を愛用する。

【割断の聖人】ウーリア・デュフネス・サーズ、改め『断聖』。聖王国貴族出身。女性でありながら、身の丈ほどの長さを誇る両手長剣の【神器】である【割断神之魂剣】を愛用する。

【狩獵の勇者】にして【枢機卿】のラン・ベル、改め『狩勇』。三十代前半の美女。弓の【神器】持ち。その仲間五名。

【数式の勇者】にして【枢機卿】のムテージ・ベイドラス・ディノア、改め『数勇』。老翁。【神器】持ち。その仲間四名。

【天声の勇者】ブランドネス・ダイオル・オルケストル、改め『声勇』。今はなき小国の音楽一族出身である妙齡の女性。【神器】持ち。その仲間四名。

【愛の勇者】ラヴァーズ・アモール、改め『愛勇』。褐色の美女。【神器】持ち。その仲間六名。

【料理の勇者】セルバンテス・アルバンテス、改め『飯勇』。平民出身の中年男性。料理の達人で【神器】持ち。コイツだけは是が非でも生け捕りにする予定である。最悪の場合、死体だけでも回収すべし。その仲間五名。

【狂気の勇者】クルトウク・トイクス・アブトラクフ、改め『狂勇』。聖王国貴族の初老男性。その仲間五名。

【円環の勇者】ウロボレアス・リンデル・バウヘルム、改め『円勇』。聖王国貴族の青年。その仲

間六名。

【仮面の勇者】ペルソル・マスクレイド、改め『面勇』。少数民族出身の青年。その仲間四名。

【毒茸の勇者】マシユルム・ポインズ、改め『茸勇』。少数民族出身の少年。その仲間五名。

【共振の勇者】ハウリデス・デュノア、改め『共勇』。平民出身の少年。その仲間四名。

【星読英雄】にして【枢機卿】のアルドラ・オーブス・エスメラルダ、改め『星英』。年齢が化物級老婆。水晶型の【神器】持ち。その配下《星叡部隊》一〇〇名。

【書冊英雄】にして【枢機卿】のイムルスカ・ファレス・トードル、改め『書英』。老爺。書冊型の【神器】持ち。配下は無し。

【探求英雄】ハワーリップス・クイリス・アブトラクフ、改め『探英』。聖王国貴族の初老男性。狂勇の弟。その配下《禁忌改人軍》二〇〇名。

【悪銭英雄】アクガーネ・タメル・アクドーク、改め『銭英』。太った中年男性。その配下《金儲け隊》一〇〇名。

【炎舞英雄】リズミオ・トッテルネン、改め『舞英』。盲目の青年。その配下《踊り子紅蓮隊》五〇〇名。

【鋼殻英雄】メルディ・ベルナ、改め『鋼英』。少数民族出身の少女。配下は無し。

【魔鳥英雄】ディノバーノ・エインス、改め『鳥英』。平民出身の少女。その配下《魔鳥黒群》

一〇〇〇羽。

【豊穰英雄】アシユルテ・ムンディボ、改め『豊英』。恰幅の良い中年女性。その配下《豊穰動樹》一〇〇〇名。

【飛魚英雄】フラフィ・フィフィル、改め『魚英』。島育ちの青年。その配下《飛翔魚群》四〇〇名。

《キーリカ帝国》所属。

【黒雲の勇者】クラウドラス・ベルマウストス・グフスタフ、改め『雲勇』。中年男性。序列第二位。【神器】持ち。その仲間五名。

【雷鳴の勇者】アルトウネル・ベアーダ・リッケンバー、改め『雷勇』。男装の麗人。序列第三位。

【神器】持ち。その仲間五名。

【剛脚の勇者】アンダーソン・ボーキヤク、改め『脚勇』。青年。【運命略奪】された組。その仲間六名。

【斬糸の勇者】ディオリマス・アイオドス、改め『糸勇』。女性。【運命略奪】された組。その仲間三名。

【骸蟲英雄】フィリポ・ベルド・ロツカータ、改め『蟲英』。以前俺が戦って逃がした少年。序列

第七位。その配下【魔蟲】無数。復讐者——【陽光の勇者】が狙う獲物。

【覇狼英雄】ウオルフ・ヴォルフ、改め『狼英』。平民出身の中年男性。【運命略奪】された組。その配下《狼化闘軍》五〇〇名。熱鬼くん達と少し因縁があるらしい。

【砂牛英雄】ヌー・ウシカ、改め『牛英』。【運命略奪】された組。その配下《砂牛蹄群》六〇〇体。

王国所属。

【岩鉄の勇者】岩勇。頭部に秘密を抱えた男。その仲間四名。俺と友好関係にあるお転婆姫との取り決めに、今回は【鬼哭の賭場】にて遊んでいてもらう予定。

その他小国所属。

【爆発の勇者】ボムル・ボボルル、改め『爆勇』。小国の青年。その仲間五名。

【腐浄の勇者】キフスⅡデナⅡエルナ、改め『腐勇』。妙齡の女性。その仲間四名。何処かの誰かと雰囲気似ている。

【雷雨英雄】アルララ・ラララ、改め『雷英』。無表情な女性。【神器】持ち。配下無し。

『同盟軍』

《アタラクア魔帝国》所属。

【魔帝】ヒュルトン・ガスクラウド・アタラクア。男性。多分【神器】持ち。要注意人物。少し特殊な魔法を使ってくる。

【重黒将】ゼムラス・ス・スラムゼ、改め『黒将』。不定系魔人。性別不明。【六重将】第二席。

【重翠将】ファルニアⅡヤルウ、改め『翠将』。鳥類系魔人。女性。第三席。

【重緋将】バララーク・バラク、改め『緋将』。金属系魔人。男性。第四席。

他、精鋭部隊二〇〇〇名。

《エストグラン獣王国》所属。

【獸王】ライオネル・ガウロ・エストグラン。男性。多分【神器】持ち。要注意人物。肉体面では間違いなくトップクラス。

【雷豹牙将】チチルタ・ラーチラ、改め『豹将』。【獸牙将】二牙。ヒョウ系獸人。男性。自由人。

【黒斑牙将】ハイエルダ・ダーフス、改め『斑将』。四牙。ハイエナ系獸人。女性。苦勞人。

【剛猿牙将】ゴリ・ゴリーラ、改め『猿将』。五牙。ゴリラ系獸人。男性。脳筋。

【河馬牙将】ヒポポ・タモス、改め『河将』。六牙。カバ系獸人。男性。楽道家。

【獵兔牙将】ラビ・トトリ、改め『兔将』。九牙。ウサギ系獸人。少年に見える老翁。腹黒い。

【紅猪牙将】^{カキホルビツアフロウ} ブラヌ・ブル、改め『猪将』。十牙^{テイクワ}。イノシシ系獣人。少女。天然。

——となっている。

主力になるだろう人物はより詳しく説明してみたが、そこまで詳しく覚えなくてもいいだろう。その他の者についても、何となくサラッとで十分だ。

それを迎え撃つは、俺率いる傭兵団《戦に備えよ》である。

さて、こちらに対して前後から侵攻してくる両陣営であるが、やはり【鬼哭神火山】ではその暑さが問題になる。

何の対策もしていなかったら、数分と経過せずに肉体が燃えて死ぬ事になるだろう。

専用のアイテムがあればある程度防げる、というのは、俺達自身ここが【フレムス炎竜山】^{えんりゅうざん}だった頃に攻略した事からも証明されているが、流石にこの数だ。

少数精鋭の同盟軍はともかく、連合軍は全員分を揃えるとなるとそれなりに大変だ。しかも予備などを含め、その数倍は必要になる。

過酷な【鬼哭神火山】の環境では些細な準備不足ですら致命的になる為、決して無視する事はできない。

しかし連合軍は『大量のアイテムを用意する』とは別の方法——保険として一応全員に魔法薬を

配布してはいるようだが——で解決していた。

入ってくる前に、【神器】持ちの一人である声勇パーティと、それに追隨する共勇パーティ、そして舞英とその配下達が自前の能力を使ったのだ。

声勇は、多数に影響を与える【英雄】と酷似した結果を出す事ができる性質の能力を持つ、珍しいタイプの【勇者】だ。

歌声で仲間を増強、あるいは敵の能力を減退させる【吟遊詩人】^{ミンストレル}系の上位職を複数所持し、更に【天声の神】から与えられた【加護】によって大幅に強化されている声勇の歌声には、聴いた者達に様々な影響を及ぼす力がある。

そんな声勇の心を直接震わすような澄んだ歌声と、仲間達が持つ打楽器や弦楽器など多彩な楽器によって奏でられたのは、『ディエノスの炎天回路』^{えんてんくわいろ}と呼ばれるものだった。

歌の内容は省略するとして、その効果は味方に対して【高温適応】【平常行動】【炎熱耐性】【身体強化】などを一時的に付加するモノである。

煌びやかなマイク型【神器】である【天声神之魂声機】^{ヘブンディエス・マイク}との合わせ技により、持続時間は驚異の丸一日。普通なら数分、長くても数十分程度しか持続しない事を思えば、どれだけ凄まじいかわかるだろう。

ただ、効果範囲は歌声が聞こえる距離まで、という制限がある。

連合軍は不意の奇襲で壊滅しないように、密集せず少し間隔を空けていた事もあり、この人数だと聞き洩らす者も出たかもしれないところだが、そこで活躍するのが共勇だった。

【共振の神】の【加護】を持つ共勇は、声勇の歌声と共振——音なので共鳴という方が適切かし、増幅させて周辺一帯に響かせる。

ある種のスピーカー、と言えいいのだろうか。まるでライブのように、熱く激しい歌声と演奏が【鬼哭神火山】外縁部に轟いていた。

そしてその演奏の中、舞英とその配下である《踊り子紅蓮隊》五〇〇名は前方に突出し、曲に合わせて舞い踊った。

すると【鬼哭神火山】のアチコチにあるマグマの噴出や溶岩の流動が、まるで支配されたかの如く、舞英の一挙手一投足に追従して動き、紅蓮が舞い踊る。

徐々に盛り上がる声勇の歌声に合わせるように、舞英の踊りも熱く激しくなる。まるで音と一体化したような踊りには、見る者の心に訴えかける力強さがあった。

そしてそれを見た者達は、【炎舞高揚】【炎舞強身】【炎舞強心】などにより、身体能力や戦意などが大幅に増加する。

効果持続時間こそ声勇の能力に劣るものの、それでも数時間持続する各種の恩恵により、戦力は短時間で倍増した。

そうして高熱をモノともしなくなった連合軍は、全体の行軍速度も大幅に上昇した事により、破竹の勢いで中心部へと向かってくる。

時折ダンジョンモンスター達と遭遇するも、数の暴力で鎧袖一触だった。

直進してくる連合軍は、奇しくも同盟軍とほぼ同じタイミングで、溶岩壁がある区画にまで到達した。

対岸に渡る為の橋は無いし、溶岩壁の上には精製竜が巣を作っている為、飛び越える事もできない。

無事到着したところを見計らい、俺は【フレムス炎竜山】の【迷宮主】であった灼誕竜女帝からラーニングしたアビリティ【迷宮警備員・主任】を使いながら床ドン。両陣営の進行方向の地面に、石版と、外装を溶岩で加工した【鬼哭門】を出現させた。

連合軍の方の石版には『最も容易な試練である。四人の【英勇】とその仲間を戦場に捧げよ。さすれば未来への橋が架かるであろう』と、同盟軍の方の石版には『最も安易な試練である。三名の【将】と千の兵士を戦場に捧げよ。さすれば未来への橋が架かるであろう』と書かれている。

しばらく相談した末、連合軍の方は聖王国の面勇と円勇と鳥英、そして帝国の牛英が選ばれて【鬼哭門】を潜り、同盟軍の方は河将と兎将と猪将、そして魔帝が選んだ千名の兵士達が【鬼哭門】を潜った。

選ばれた者達が全員潜ったところで、ズゴゴゴゴッ！ という効果音と共にマグマの大河から溶岩製の橋がせり上がる。

それに合わせて、高熱で赤く輝く橋の先にある溶岩壁の一部が、まるで巨人に両断されたかのよう道を開けた。

大規模な地形変動はある種の神秘さすら感じさせるのだろう、救聖以外の全員がしばしの間見入っていた。

この演出は少し凝って弄ったところなので、両陣営の反応は俺の苦勞に見合うモノだった。頑張った甲斐があったというものだ。

などという個人的感想はさて置き、出現した橋を渡った両陣営は、更なる侵攻を開始する。

ちなみに【鬼哭門】を潜った者達は、団員達の為に【鬼哭水の滝壺】の四十六階に用意した狩獵場に転移し、連合軍同盟軍の区別なく攻撃を受けていた。

攻撃の内容は実にシンプルだ。

腰くらいの高さまで水が張ったすり鉢状の地形の中心に居て、まだ状況を把握できていない彼等に、その周囲を取り囲む二〇メートルほどの高台から【骨杭射小銃】や様々な系統の【魔法】を一斉に撃ち込むだけだ。

正面からぶつかっていかず、できるだけ安全に敵を屠る奇襲作戦である。

短時間で雨霞と降り注ぐ攻撃は狙い通りにハマり、数秒ごとに敵陣営の被害は拡大していく。

しかし今回の相手は雑魚ではない。

【ネルメアの獅子面】を取り付けて鋼鉄の獅子獣人になった面勇が、円形の特殊な双剣【円月蛇剣】を高速で振るう円勇が、【鳥停の魔笛】による旋律で多種多様な魔鳥を従える鳥英が、【アムルノア牛刀】を持って獰猛な魔牛達の先陣を走る牛英が、その力を発揮する。

あるいはヒト一人を丸呑みできそうなほど大きな口が特徴的な河将が、二本の短剣と長く鋭い刃の付いた尾で首を切り落とす戦法を得意とする兎将が、突破力に飛び抜けて優れた猪将が、魔帝国の精鋭達と共に奮闘していた。

普通なら簡単に圧殺できそうなほどの攻撃量だったのだが、予想以上の立て直しの早さと個々の戦闘能力の高さから、倒せた数は予定よりも若干少ないようだ。

まあ、まだ始まったばかり。

保険として鈍鉄騎士や秋田犬、クマ次郎やクロ三郎など【鬼乱十八戦将】も居るので、何とかしてくれるだろう。

そちらは任せるとして、溶岩壁を越えて進む連合軍と同盟軍の本隊に対し、小手調べとして複数のフィールドボス達をぶつけてみる。

俺の影響で以前よりも強化されていたものの、流石に戦力差が大きく、あっさりと負けてし

まった。

だが、それにより俺は十分な情報を確保できている。フィールドボス達はちゃんと役割を全うしたと言えるだろう。

その後も細々とした戦闘を続けながら進んだ両軍は、しばらくして次なる試練に直面した。

といつても、少し巨像などを付け加えた豪華版溶岩壁とマグマ堀がまた立ち塞がっただけである。ここでは、連合軍の方の石版には『縁ある者との試練である。【骸蟲英雄】【霸狼英雄】【岩鉄の勇者】【料理の勇者】とその仲間を戦場に捧げよ。さすれば未来への橋が架かるであろう』とあり、同盟軍の方の石版には『終焉の前の試練である。耐久力に優れた【巨鬼魔像】を見事粉碎してみせよ。さすれば未来への橋が架かるであろう』とある。

先程と同じように、指定された連合軍の四人の【英勇】は【鬼哭門】を潜って別の迷宮へと転移していく。

蟲英はヤル気満々の復讐者達の所に、狼英は熱鬼くんや風鬼さん達の所に行き、一方で岩勇達は【鬼哭の賭場】にしばらく滞在してもらう予定だ。

飯勇に関しては、本当は蟲英や狼英のように縁ある者など居ないのだが、ここで確保しておけば後々楽だろう、という事で一足先に俺の下までやってこさせた。

【鬼哭門】から出てきた直後、螺旋火山の山頂で待ち受けていた俺が何者なのかは、飯勇にもひと

目で分かったようだ。一瞬だけ取り乱した飯勇だったが、即座に精神を持ち直した。伊達に経験を積んでいないらしい。

黒いコックコート型防具を纏う飯勇は、右手に包丁型【神器】である【料理神之魂包丁】を、左手に鍋型【神器】である【料理神之魂鍋】を構えた。まるでヒヨコのような丸々とした体躯と人好きのする顔立ちをしているからか、中年男性ながら飯勇には何処か可愛らしさすら感じられる。

それから、自分のものと似たデザインの白いコックコート型防具を装備した、仲間であり弟子である料理人達に指示を出した。

即座に体勢を整える様には、流石は【神器】持ちのパーティだと感心する。

それに満足しつつ、朱槍——【飢え喰る朱界の極槍】と愛用のハルバードを手に持ち、飯勇を捕らえる為に駆け出すと——

「夜天童子の【異教天罰】が発動しました」

「これにより夜天童子は敵対行動／侵攻開始を行った《異教徒／詩篇覚醒者》に対して【終末論・征服戦争】の開戦を宣言しました」

「両者の戦いが決着するまで、夜天童子の全能力は【三〇〇%】上昇します」

【特殊能力】スペシャルスキル【異教天罰】は決着がつき次第解除されます」

——復讐者や水勇みずゆうと戦った時と同じように、俺の脳内でアナウンスが流れた。
飛躍的に向上した身体能力を完璧に制御しつつ、飯勇達へと朱槍とハルバードを繰り出す。
そして二分も経たず……

「決着がつかしました」

【特殊能力】**【異教天罰】**は解除されます」

「夜天童子は《異教徒／詩篇覚醒者》との【終末論・征服戦争】に勝利した為、報酬が与えられます」

「夜天童子は【料理之調理具】クッキング・オーセルを手に入れた!!」

生体ならば防御力を無視して切断できる【料理神之魂包丁】と、同じく生体なら防御力を無視して炒めたり煮たりできる【料理神之魂鍋】を相手にするのは少々面倒だった。が、それでも朱槍や銀腕で対処できる程度に過ぎない。

個人的にはその二つよりも、飯勇とその仲間達を殺さずに無力化する事の方がまだ苦勞したくらいだ。

ともあれ、飯勇達は黄金糸でグルグルに拘束された状態で椅子いすに座っている。

少々反抗的な態度をとられるが、復讐者のように仲間にする為、説得を試みる。

別にわざわざそんな事をしなくてもいいのだが、気持ちよく仲間になってくれた方が後々の関係が良好になるだろう、と思つての事だ。

そんな訳で、色々と話してみた。聖王国の暗部についてとか、飯勇達の家族が今どうしているかリアルタイムでの中継とか、本当に色々だ。

すると、最初は反抗的だった飯勇達も理解できたのだろう、顔が紅潮こうしやうしたかと思えば蒼褪あおぞめ、最後には白くなって了承してくれたのだから。

「夜天童子の【運命略奪】が発動しました」

「これにより《詩篇覚醒者／主要人物》メインキャストであるセルバンテス・アルバンテスの運命が夜天童子の支配下に置かれた為、英勇詩篇〔満腹料理への道標〕みちしるべは世界詩篇〔黒蝕鬼物語〕ワールドエピックに組み込まれます」
「最上位詩篇に組み込まれた為、国家詩篇〔ルーメン〕から英勇詩篇〔満腹料理への道標〕が永久的に削除されました」

「詩篇転載の為、英勇詩篇〔満腹料理への道標〕の《副要人物》サブキャストである称号【畜産料理長】【水産料理長】【農産料理長】【甘味料理長】【香辛料理長】保因者の【詩篇能力／特殊能力】は一時凍結

されます」

「英勇詩篇『満腹料理への道標』の《詩篇覚醒者／主要人物》と《副要人物》の能力解放決定権は、掌握者である夜天童子に一任されました」

「以後《詩篇覚醒者／主要人物》であるセルバンテス・アルバンテス、ならびに《副要人物》の能力解放は夜天童子の意思によって行われます」

【運命略奪】により、無事に飯勇を引きずり込めた。

これにより美味い飯が楽しめそうだ。

とりあえず反乱防止の為に分体を飲ませた後、*「ブラックフォモール」*の肉を使った料理を作った。でももう事にした。

そんな事をしている間に同盟軍と対峙していた【巨鬼魔像】はというと、【魔帝】が黒い孔から【召喚】した無数の太く長大な触手によって拘束され、全身から黄金の闘気を迸らせる【獣王】の拳によって胸部を粉碎されてしまった。

結構な自信作がアッサリと倒されて悔しくもあるが、仕方ないと諦める。

ともあれ、両陣営共に条件をクリアした事で、再び橋がせり上がる。

今回の橋の演出は、前回のものに加え、溶岩壁の脇にある巨像が動いて左右に並んだ。その巨像

達が持つ武器が橋の上空で交差し、ある種のパレードのようになっていた。

連合軍と同盟軍の本隊はそれを潜り抜けた後、俺達が待つ螺旋火山の麓にて、進撃を一旦止めるようだ。

まあ、何だかんだとここまで到達したのは既に夜である。

起伏の激しい過酷な地形が続く中でそれなりの距離を進んできただけでなく、道中襲い掛かってくるダンジョンモンスターとの戦闘があった。となれば、どうしたって心身共に疲労するし、人数からしていくら行軍速度が速いといっても限界がある。

明日の本番に備え、体力を蓄える事を選択したらしい。

そのまま突っ込んでくれば疲労がある分楽だったのだが、これはこれで面白い。とりあえず、団員達の戦いがどうなったのか確認すると――

「保有迷宮内にて【仮面の勇者】が死亡しました」

「死亡した事により流出する【神力】の一部が迷宮に吸収され、【神器】として再変換されます」

「夜天童子は【仮面之魂封面】を手に入れた！」

「保有迷宮内にて【円環の勇者】が死亡しました」

「死亡した事により流出する【神力】の一部が迷宮に吸収され、【神器】として再変換されます」
「夜天童子は【円環之魂蛇剣】ロボロス・ス・セリナスを手に入れた！」

「保有迷宮内にて【魔鳥英雄】が死亡しました」
「死亡した事により流出する【神力】の一部が迷宮に吸収され、【神器】として再変換されます」
「夜天童子は【魔鳥之魂律笛】ガルド・イ・フ・ルトを手に入れた！」

「保有迷宮内にて【砂牛英雄】が死亡しました」
「死亡した事により流出する【神力】の一部が迷宮に吸収され、【神器】として再変換されます」
「夜天童子は【砂牛之魂角斧】ヌスト・ウ・ラ・ビュスを手に入れた！」

「保有迷宮内にて【霸狼英雄】が死亡しました」
「死亡した事により流出する【神力】の一部が迷宮に吸収され、【神器】として再変換されます」
「夜天童子は【狼之魂牙剣】ウル・ファ・ア・ロスを手に入れた！」

「保有迷宮内にて【骸蟲英雄】が死亡しました」

「【運命掌握】下にある【陽光の勇者】が倒した為、【神力】は【神器】として既に変換されています」

——こうなっていた。

正直、驚きを隠せない。

直接でなくても、支配した迷宮内で倒せば【神器】は獲得できる。
それを現時点で把握する事ができたのは、非常にありがたかった。

「世界詩篇【黒蝕鬼物語】第六章【神災暴食のススメ】の第八節【愚者の刃】ウル・ード・ガルダの隠し条件《愚かなる者》《求めし刃》がクリアされました」

《三百四十二日目》

聖戦二日目。

昨日の戦いは紆余曲折あったものの、無事終局している。

最終的なこちらの被害は、約三〇〇〇の団員の内、死亡したのが約八〇〇名、重軽傷者多数、という結果になった。

【英勇】という《主要人物》六名、その仲間である《副要人物》、他多数を討ち取る大戦果からすれば損害は軽微とも言えるだろうが、しかし実質的には全滅している。

こちらには治療能力に優れたセイ治くんが居るので、重傷者の多くは治療が間に合って死者がこれだけで抑えられたが、そうでなければ全滅ではなく壊滅していた可能性が高い。

舐めていた訳ではないが、【英勇】やそれに準じる存在を複数同時に相手に回すのは、団員達にはまだ早かったのかもしれない。

だが今更そう言っても意味は無い。

そもそも【聖戦】への参加は、自主的に決めさせた。ここに居るからには、命を落とす危険性を理解し、それでも参加を決めた者なのである。

ならうだうだと悩まず、居なくなった者達の分まで、進んで行くしかない。

南無阿弥陀仏、と冥福を祈りつつ、後日弔う為に団員達の遺体は全て回収した。

それと並行して回収された【英勇】達の遺体は、俺の【異空間収納能力】に放り込んで保存しておく。まだ【聖戦】は始まったばかり、終わってからまとめて喰う予定である。

とはいえ腹は空くので、牛英が率いていた魔牛の肉を食材として、飯勇に朝食を作らせる事にした。

メニューはシンプルにステーキだ。香ばしい肉の匂いが食欲を刺激して、思わず感謝しながら口

に運ぶ。

そして肉に歯が入った瞬間、言葉を失った。

上質な魔牛の肉はほどよい柔らかさがあり、口内で肉汁が溢れ出る。

それだけならば単に上質なステーキだ。

しかし、飯勇の料理には様々な技術と工夫が施されているのだろう。その美味さに、ただただ腕が動く。ひたすら顎が上下して咀嚼を続ける。舌が次から次へと胃にステーキを運搬する。

【神器】と比べれば劣るものの、それに迫らんばかりの美食であった。

そんな至福の朝食を終えて、心地よい余韻を満喫していると、どうやら連合軍と同盟軍の本陣が行動を開始したようだ。

螺旋火山では、両陣営が衝突しないように、坂道が二重螺旋を描くように調節してある。

頂上に登るまで交わらなくなった結果、連合軍と同盟軍は大体同じ頃に登頂し終えた。

山頂は、以前なら上空に重苦しい黒雲が君臨し、飛び金属塊を渡っていた先には火口に浮かぶ決闘場が存在した。

しかし現在はそれとは少し異なる。

上空の黒雲は変わらないが、飛び金属塊は無くなり、火口全てに蓋をしたような円形の決戦場と化している。

決戦場の直径は約三キロ。大人数による戦闘でも支障が無いように、遮蔽物の類は一切存在してない。

そんな決戦場の中心にて、俺は大昔の魔術師ベルベットが最後に座っていたあの豪華な椅子に腰かけている。

周囲にはミノ吉くんなど【八陣ノ鬼将】全員も座し、今今かと戦意を漲らせていた。

登って来たと同時に奇襲してもよかったのだが、せっかくの【聖戦】だ。

相手がある程度陣形を構築するまでこちらでも動かないと事前に決めていたのだが、待っている間に連合軍の方から『神意である。皆命を賭して、【飽く無き暴食】を成敗するのです』などと色々言われた。

恐らく、開戦前の宣言みたいなものだろう。

わざわざ付き合う必要性は感じないのだが、とりあえず耳を傾け、準備が進んだ頃合を見計らって椅子から立ち上がる。

——本格的な【聖戦】がいつ始まったのかと言えば、この時こそがそうだった。

ただ戦い、強い方が喰い、弱い方が喰われる。

とてもシンプルな、弱肉強食の戦いだ。

相手の準備が整ったのを確認して、俺は開戦を告げるひと声を解き放つ。

それは破壊を伴った、咆哮という名の攻撃である。

「夜天童子の【異教天罰】が多数に対して発動しました」

「これにより夜天童子は敵対行動／侵攻開始を行った『異教徒／詩篇覚醒者』率いる軍勢に対して

【終末論・征服戦争】の開戦を宣言しました」

「両軍の戦いが決着するまで、夜天童子の全能力は【三〇〇％】上昇します」

「共闘補正【参神級】により、雷炎牛皇の全能力は【二二〇％】上昇します」

「共闘補正【弑神級】により、月蝕神醒の全能力は【二二〇％】上昇します」

「共闘補正【壹神級】により、大地母鬼の全能力は【二〇〇％】上昇します」

「共闘補正【弑神級】により、流星魔涙の全能力は【二〇五％】上昇します」

「共闘補正【弑神級】により、灼血闘剣の全能力は【二〇五％】上昇します」

「共闘補正【壹神級】により、慈善救命の全能力は【二〇〇％】上昇します」

「共闘補正【壹神級】により、魂魄腐界の全能力は【二〇〇％】上昇します」

「共闘補正【壹神級】により、運命導眼の全能力は【二〇〇％】上昇します」

「特殊能力【異教天罰】は決着がつき次第解除されます」

何気にスペ星^{せい}さん達の“真名^{マナ}”が初めて出たりしたが、それについて考えるのは後でという事にしておこう。

明確な殺意と殺傷力を秘めた俺の咆哮が敵陣営を直撃するも、防がれてしまったのだから。

真なる【聖戦】の始まりを告げたのは、空間を破壊するような鋭い鬼声^{きせい}だった。

「オオオオオオオッ！」

そこは、かつて【フレムス炎竜山】だった頃よりも高く、大きくなった【鬼哭神火山】の中央に存在する螺旋火山の頂上。対策無しでは数分と持たず焼死を免れない、獄炎^{ごくえん}が支配する迷宮の最奥。頭上には重圧感漂う分厚い黒雲が鎮座^{ちんざ}する、まるで死者が最後に行き着く場所かと見間違うそこには、広大な決戦場が用意されている。

その中央にて待ち構えていた九鬼の内の一体——【世界の宿敵・飽く無き暴食】として選ばれたオバ朗が、座していた椅子から立ち上がり、明確な殺意をもって発した咆哮だ。

無論、それがただの咆哮である訳が無い。

元々、【金剛夜叉鬼神・現神種^{ウツクニヤクシャゴクンゲンシノシズ}】にまで【存在進化^{ラシクアツプ}】しているオバ朗が意図して放つ咆哮には、

聞いた者の心身から力を奪い、あるいは即死すらさせる恐るべき効果がある。

ある一定以上の存在ならば同じような事ができるが、それらと比べても一段と強力だ。

本来の咆哮ですら、軍隊を壊滅させかねない威力がある。にもかかわらず、今回はたとえ強靱な【知恵ある蛇／竜・龍】であつても聞いただけで高確率で死亡させる【告死鬼^{デスベ}の奪命声^{バッド}】と、膨大な魔力を用いて聞いた者に強力な状態異常と物理的破壊を齎^{もたら}す【竜帝の爆炸咆哮^{エンペラードラゴン・エクスプロージョン}】という、二つの強力なアビリティを重複発動させた状態で放たれていた。

その結果、呆れるほど膨大で、理解できないほど濃密な魔力によって赤黒く可視化された音速の破壊咆哮が、オバ朗を中心に全方向へと広がっていく。

当然、オバ朗のすぐ傍に居たミノ吉達も瞬時にその破壊咆哮に吞み込まれた。しかし、そもそも個々が強力無比な存在であつた事と、予めセイ治が張り巡らせていた積層式^{シエイトレイルド}【聖力領域】や障壁系のマジックアイテムの効果によって、被害は一切無かつた。

しかし、それ以外の万物は例外なく破壊の脅威に晒^{さら}される。

まず最初に決戦場が影響を受けた。

破壊咆哮の発生源であるオバ朗を起点に、まるでガラスを砕いたかのような大小無数の亀裂^{きれつ}が生じ、衝撃で飛散した破片は空中で更に微細に砕かれて砂と化す。

本来なら小さな傷を残す事すら困難を極める迷宮の一部でなければ、この時点で決戦場は崩壊し

ていただろう。

それほど力を秘めた破壊は、広がり続けても尚、一切衰える事なく、決戦場へと足を踏み入れた連合軍と同盟軍に襲い掛かる。

両陣営からすれば、突如として赤黒い壁が眼前に発生し、それが凄まじい速さで膨張しながら迫ってきているようにしか見えなかっただろう。

「御心のままに」

迫る赤黒い壁に触ればどうなるか。生物としての本能から、誰もが『死ぬ』と理解した。

理解したが、迫り来る速度が速過ぎて、また規模が大き過ぎた為に、連合軍においても同盟軍においても、咄嗟に行動に移る事ができたのはごく限られた存在だけだった。

「世界に光在れ」

破壊咆哮が到達するまでの猶予は五秒にも満たない。

その間に対処しなければ、両陣営の兵士達の身体は瞬時に血煙になるまで破壊され、この世に肉片一つ残す事もなかっただろう。

屈強な「英勇」達ならば残骸くらいは残ったかもしれないが、殆ど何もできずに全身を蹂躪され、屍を晒した事は想像に難くない。

しかしそれは仕方のない事でもあった。



音を触媒にした攻撃を防ぐ手立てなど、そうあるものではない。反応する事すら困難である。

だが、約五千名に上る連合軍には、【英勇】を超える【救聖】が居た。

「——^ク精錬^イ武救^アの聖神鎧^{レス・ラ}」

まるで全ての災いを薙ぎ払うかのような神秘的で暴力的な白刃を備えた純白の杖——【大神の神器】である【誕^{セイ}叙^イ大神^ア之魂^ホ界^ワ杖^{イト}】を構えたアンナリーゼが、【白^{セイ}き^ウ誕^イ叙^アなる救世主^{ザ・ホワイ}】だけに行使可能な【魔法】を圧縮詠唱にて発動させた。

即座に発動できる代わりに威力が落ちる無詠唱や、必要な部分だけを選別して短時間で発動させる短縮詠唱などとは異なり、短いワードに複数の意味を持たせる事で、発動時間を早めつつ順当に詠唱した時よりも更に威力を高めるといって高等技術である。

その【魔法】は光速で連合軍に所属する全ての存在に届き、【劣^ア化^ホ神^{リス}兵^{テル}】【聖^ラ神^イ鎧^グ】【聖神耐性強化】【聖神戦技】【一度だけの救済】という能力を一時的に付与し、破壊咆哮という絶望的な【死^シ】に抗^{あらが}うだけの力を与えた。

しかし、それでもまだ足りない。

決戦場の碎かれた砂という研^{けん}磨^ま剤を取り込んで、更に破壊力を引き上げた破壊咆哮の前では、それすら多少生存確率を上げるだけ。

軍隊として殲滅^{せんめつ}は回避できるにせよ、壊滅^{かいめつ}と言える被害が出る。

「イイイイイイアアアアアアアアアアアアッ！」

それを回避する為、【救世主^{セイ}】であるアンナリーゼにつき従う【聖人^{セイ}】の片割れ——【割断の聖人】のウーリアは最前線へ飛び出した。

助走も無く、たった一度の跳躍で連合軍の中央から数百名以上居た兵達の頭上を雷の如き速度で越え、着地と同時に裂帛^{れっぱく}の気合を伴って横一閃を放つ。

【ウーリア・デュフネス・サーズは戦技【割断剣^{クリ}・大界横断^{ワールド}】を繰り出した】

ひと目見ただけで心を奪われそうになるほど美しい、両手長剣型の【神器】である【割断神之魂剣】に、卓越^{たくちやく}した技術と強力無比な戦技^{アーツ}が合致した事によって生じた、極大の黒い斬撃。

軌道上の空間を切断しながら飛翔するウーリアの一閃は、迫る破壊咆哮と正面から衝突する。

元々ウーリアの斬撃の威力は、【帝王】類の竜種が放つ【息吹^{ブレス}】と互角以上に渡り合えるだけの段階に達していた。

そこにアンナリーゼの支援や、【救聖詩篇】によって発動した【終末論・征服戦争】の効果で大幅に強化された現在、その数倍の破壊力を持つに至っている。放てば敵を確実に葬^{はうむ}る、まさに必殺の一閃と言えるだろう。

しかしそれでも、まるで抗いがたい自然災害かと見紛うような破壊咆哮を完全に消す事はできなかった。

ウーリアが強化されているのと同様に、オバ朗もまた【終末論・征服戦争】の効果で強化されているからだ。

その為、勢いを削る以上の事はできず、最前線に躍り出た故にそのまま破壊咆吼に呑みこまれ、後方に大きく吹き飛ばされそうになるほどの衝撃に襲われた。

「イーシエル、次は頼みます」

しかし斬撃によってその威力は大幅に落ちていた。破壊咆哮を浴びても、ウーリアが死ぬ事はなかった。

全身を保護する光の鎧【聖神鎧】は目に見えて削られ、時折突破されて傷を負い血を流すものの、どれも浅く致命傷にはならない。アンナリーゼによって付与された能力が無ければもう少しダメージを負ったかもしれないが、それでも【英勇】を超越した存在である【聖人】のウーリアならば、数秒で完治する程度だ。

しかしそれだけ威力が減じた状態の破壊咆哮でも、まともに浴びれば【英勇】達ですら大ダメージを負ってしまいかねず、いわんやその配下である兵士達では戦闘など不可能になる。

だからウーリアは全身を破壊咆哮で痛めつけられつつも、血を分けた双子の片割れ——【境界の

聖人】のイーシエルに守りを託す。

「はい、任されました」

ウーリアに僅かに遅れて最前線に立ち、荘厳な装飾を施された金属盾型の【神器】である【境界神之魂盾】を構えたイーシエルは、目前に迫った破壊咆哮に耐える為に腰を落とした。

女性ながら長身のイーシエルをスッポリと隠せるほど大きな【境界神之魂盾】は、まるで地面に根を生やした大樹のような力強さを宿すイーシエルに支えられ、戦技と共にその真価を発揮する。

「イーシエル・ヴォルフシュ・サーズは戦技【境界盾・白界鏡壁】を繰り出した」

まるでそこで世界を区切るかのように、【境界神之魂盾】を起点として上下左右に白い光の壁面が構築された。

直後、赤黒い破壊咆哮と白い光の壁面は衝突し、何処にも逃げ場が無くなったエネルギーを間に挟んで両者はせめぎ合う。

しばしの間拮抗したが、ウーリアに斬られた事で勢いを失っていた破壊咆哮の方が徐々に並び、やがて白い光の壁を避けた方向に散って行った。

「——ふう、流石は【世界の宿敵】、といったところですね。勢いを衰えさせて尚、この威力と

は……」

物理的な圧力による肉体の疲労からか、あるいは眼前に迫った脅威と対する精神的な重圧からか。額に汗を滲ませながら、イーシエルは【境界神之魂盾】から顔を覗かせる。

その視線の先には、滅茶苦茶に荒れ果てた決戦場の姿があった。

中心部に近いほど深く掘り下げられた地形を見て、『まるで天から隕石が降って来たみたいね』とイーシエルは独り言ちる。

たったひと声で、これほどの影響を及ぼす存在。

遠くに居るオバ朗の姿を細部に至るまで視認しながら、イーシエルは静かに武者震いした。

「ガオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

再度、決戦場に咆吼が轟いた。

思わず耳を塞ぎたくなるほどの大音量であり、含まれる魔力の膨大さと鮮烈な殺意は強烈だ。

通常なら、精神を強く保たなければ呑み込まれていたに違いない。

その為、連合軍の者達は皆一様に身構えたが、それは破壊咆吼とは違い、脅威的だがある意味で普通の咆吼だった。

それもそのはず、そもそも咆吼の主が違っている。

咆吼の主は、イーシエル達から見て、オバ朗達を越えた更に先に居た。

連合軍の五分の一度の人数で構成されている同盟軍、その中でもひと際目立つ黄金の獅子——
【獣王】ライオネルだ。

ライオネルの全身からは、離れていても認識できるほどに濃密な黄金の【闘気】が立ち昇っている。

特に両腕に纏う【闘気】が濃く、その前方にある決戦場には爪で抉ったような破壊の痕跡がある事から、ウーリアと同じく破壊咆吼を切り裂いて威力を低下させた様子が窺えた。

また、そのすぐ背後には、【魔帝】ヒュルトンによって【召喚】された《魔界》の巨大生物が居た。

外の世界を視認する為の眼球は存在せず、鱗も無ければ牙も無い、乳白色のツルツルブニブニとした皮膚が特徴的な、全長二〇〇メートルほどの巨大な龍である。

龍の名は、墮落誘う白龍王。

万物を糧とする【エネルギー吸収】という能力によって、果と定めた場所から動く事なく生涯を過ごす、墮落する白蛇が、万年生きた果てに到達する存在だ。【魔帝】ヒュルトンが【召喚】できる怪物の中でも五指に入る強さを誇る。

そのアムスドムスは、とぐろを巻いて口を大きく開け、まるで宇宙に繋がっているかのような黒い孔を覗かせていた。ライオネルでも削り切れなかった破壊咆哮を、【エネルギー吸収】によって

吸い取ったのだ。

「ガハハハハハハハハッ！ 咆哮だけでこの威力たあ、想像以上の相手じゃのお！」

「そんな気楽に笑えるような相手じゃありません。底なしのアムスドムスが、『結構お腹膨れた、こんなの初めて』と言ってるくらいデース。直撃したら、私達でも死んでたかもしれないですね」

「ガハハハハハハッ！ 全くだなオイッ。ちょいと予想以上だったが、その配下もまた予想以上のが揃っちゃってるようだぜッ！」

「恐らくデスが、八鬼の内の殆どが【帝王】類か、それに近い種族のようデース。オーフ、全く何てこった、といえはいいのでショウ」

豪快に笑うライオネルは、戦闘種族である肉食獣人としての血が騒ぐのか、纏う【闘気】がより荒々しいモノとなる。

その傍らで、表面上は呆れながら、しかし声音からは同じく戦いへの興奮が窺えるヒュルトンが肩を竦めた。

配下を引き連れ、軽く談笑しつつ荒れた決戦場の中心に向かって歩いていく両者の姿に、隙は一切存在しなかった。両者はあくまで自然体であるものの、その視線はオバ朗と彼の周囲に居る八鬼達から逸れる事はない。

何かあれば、即応じる事ができるようにしているのだ。それは世界有数の猛者であるライオネルとヒュルトンが、オバ朗達の実力の高さを実感していたからに他ならない。

そして連合軍もまた、【救世主】アンナリーゼをはじめ全員がオバ朗達を見つめていた。

「それじゃあ、約束通り今日一日は傍観するから、この後は各自の判断に任せる」

【救世】率いる連合軍約五〇〇〇名、【帝王】率いる同盟軍約一〇〇〇名、合計六〇〇〇名から注がれる視線を感じながらも、問題ないとはかりに無視し、オバ朗はそう言って再び椅子に腰かけた。そして周囲に、空間支配型防御系アビリティ【神獣の守護領域】による防御壁を構築した上で、アイテムボックスから酒瓶とコップを取り出す。

完全に寛く用意を進めるオバ朗とは逆に、ミノ吉達八鬼は抑えきれない戦意を隠しもせず立ち上がり、自身が定めた敵を見据える。

「ブルルル……己は、あの黄金ノ獅子を相手にモラうぞ」

「ほな、ウチは吉やんのサポートに回るな。【獣牙将】と【六重将】とか、それから同盟軍の兵隊でも相手にしよか」

破壊咆哮を防いだ爪撃を見ていたからか、あるいは己のように優れた身体能力を持っているからか、ミノ吉の興味はライオネルに注がれていた。アス江もそんな恋人の心境を認識し、自ら応援を申し出る。

口から雷炎を零すミノ吉は、敵を見据えたまま斧と盾を構え直し、更に並行して全身の筋肉を怒張させる。それによって、ただでさえ巨大なミノ吉はひと回りも大きくなり、見る者に圧倒的な力強さを感じさせた。

その様子を見て、ライオネルも応戦する。胸筋の厚みなどをアピールするサイドチェスト、上腕二頭筋や全身などをアピールするダブルバイセップスといったポーズが色々と繰り返され——次第に、ライオネルとミノ吉の間にある種の共感が生じていく。

まさに文字通りの肉体言語であり、暑苦しさすら感じられるやり取りが、数百メートル越しに繰り広げられる。

「ほら、それ以上は実戦でやりーな」

アス江は、自身の力強さをアピールしているミノ吉の腰を軽く叩いて暑苦しいやり取りを止めさせながら、反対の手で巨大な【大地母神の破城槌】を軽やかに肩に担ぎ上げた。

彼女の目が見据える先に居るのは、ライオネルとヒュルトンの後方に控える【獣牙将】と【六重将】、そして魔帝国の精鋭達である。

アス江は笑みを浮かべ、ジツと前方を見つめた。

全てを包み込むような雰囲気は、まるで母なる大地のような安心感がありつつ、しかしどこか冷たいモノだった。

「じゃあ、【魔帝】は私が貰おうかしら。生き血がどんな味なのか、興味あるしね」

そう言って淫靡に舌なめずりするの、カナ美だった。

普通の食事でも栄養を摂取できるにせよ、【吸血鬼】という種族において最上位の一つである【氷血真祖・超越種】となったカナ美にとって、生き血を吸いたい欲求というのは本能に近い。

カナ美にとって最も美味なる血はオバ朗のモノである事に疑いは無いが、【魔帝】という存在の血がどのような味なのかは、やはり気になってしまいうらしい。冷徹に獲物を品定めする捕食者の如き鋭い眼をしたまま、その味を想像している。

ヒュルトンもそれに応えるかのように、肩を竦めた。

オバ朗はそんな光景に何か言いたそうだったが、結局黙っている事にしたらしい。

それを見ていたブラ里は僅かに苦笑すると、続けて獰猛な笑みを浮かべながら連合軍の一角に視線を向けた。

「なら、あそこからあそこまで、私が貰っちゃおうかな。【英雄】が固まってて、やりがいがありそうだしねー」

彼女が狙いを定めたのは、連合軍の右翼側。浮遊し自走する巨大水晶に座った【星読英雄】アルドラや、周囲に十数冊の書物を浮かべた【書冊英雄】イムルスカなどとその配下が陣取っている場所である。

【ブラッド・レディ・オブ・ザ・ナイト】

【血剣軍女帝・亜種】となったブラ里は、背中に備わった血剣翼の特性——血で出来た剣を無数に生み出して操る事ができ、同時に精密操作が可能な最大数は数百、振り回す程度の単純操作なら数千にも及ぶ——もあって、多対一の戦闘を得意とする。

戦闘に入ると精神が高ぶり、普段は息を潜めている凶暴性が表に出てくるブラ里には、大勢の配下を引き連れた【英雄】が絶好の獲物に見えるらしい。

血剣翼はまるで獲物を求めるように僅かに動き、二振りのロングソード型の魔剣——右手に持つ【鮮血皇女】と左手に持つ【屍斬血狩】の柄を無意識に握り直している。

獲物をどう捌こうか脳内で思案する血に飢えた剣鬼の姿を見つつ、その傍らに立つスベ星は、彼女とは逆の連合軍左翼に目を向けた。

「そちらは里ちゃんに任せるとして、なら私はあちらを相手にしましょうか」

そこには【神器】を持つ【狩獵の勇者】ラン・ベルや、特殊な戦い方をする【数式の勇者】ムテージなどをはじめとする【勇者】が多く居た。

多彩な魔術を行使するスベ星は、ブラ里同様、多対一の戦闘を得意としている。

スベ星を中心として、恒星の周りを公転する惑星のように回遊する八個の虹色の球体の能力——結構な硬度を持つ上に思考するだけで操作でき、しかも触媒とすれば高階梯魔術の行使に本来必要な相応の手間を省けて自動的に八倍の威力になる——があれば、たとえ前衛役が居なくとも問題な

い。少数精鋭である【勇者】達を相手にしても、単鬼で十分戦えるだろう。

「では、僕は余った敵兵を相手にしましょうか。二鬼とも、それで構いませんか？」

セイ治にそう言われ、クギ芽とアイ腐は頷いた。

「はい、それが最適ですからね」

「構いません」

ミノ吉とアス江とカナ美は同盟軍に狙いを定め、ブラ里、スベ星は連合軍に狙いを定めた。

それぞれの戦闘能力を知る者ならば、たとえ敵兵の方が圧倒的に多数なこの状況でも、大丈夫だと考えるだろう。

事実その通りなのだが、しかしどうしても余る敵が出てくる。

八鬼の中では相対的に戦闘能力で劣るセイ治、アイ腐、クギ芽の三鬼は、これまで戦闘では主にサポートを担当してきた為、今回も自然とそういう事になった。

とはいえ、決してこの三鬼も弱くない。たとえ一国の軍を相手にしても殲滅しかねないほどである。

そんな自身の力量を正確に把握しているからか、多勢を相手にするというセイ治の指示にも、文句は無いようだ。

しかし一つだけ、アイ腐は要望を出した。

「が、その前に……愚腐腐腐腐、先にあちらと話をさせてもらいますね。同胞の匂いがしますので」

「それは……なるほど、構いませんよ」

アイ腐はまるで運命に導かれたかのように、とある人物をジッと見つめていた。視線の先には、ある意味当然ながら、【腐浄の勇者】キフスの姿があった。

キフスもまた、まるで導かれたかのようにアイ腐を見つめている。

両者の間で交わされる何かの正体が、付き合いの長いセイ治にはよく分かったらしい。苦笑いを浮かべ、しばらくアイ腐を自由にさせる事にした。

ともあれ、連合軍と同盟軍は到達し、八鬼はそれぞれの標的を定めた。

主役であるはずのオバ朗は決戦場の中心に陣取って静かに座し、戦況がどうなるのかしばし傍観する様子だ。

それぞれがそれぞれの思惑で動き始める中——連合軍の中心にいる【白き誕叡なる救世主】アンナリーゼは、陶醉とうずいしているかのような艶めかしい恍惚こうごうの表情を浮かべ、その顔を両手でそっと包み込んだ。

「ああ、ああ、なんて喜ばしいのでしょうか。私が果たさねばならない使命の、なんと苦難な事か。

咆哮一つで世界を破壊しかねない恐ろしさ。殺す殺されるどころではなく、対峙しただけで自身の

愚かさを理解してしまいそうになるほどの重圧感。あの【飽く無き暴食】を討伐するなど、到底不可能な事に違いありません」

アンナリーゼは呼吸を荒くしながら、周囲で始まった激しい戦闘をツマミに酒を嗜むたぐオバ朗へと、熱い視線を注いでいた。

「だからこそ、意味がある。私がこの世界に生まれた意味が、【飽く無き暴食】を打ち倒す事で約束される。ああ、ああ、なんて喜ばしい事でしょうか、なんて素晴らしい事でしょうか」

溢れ出る想いを吐き出すように、アンナリーゼは純白の杖【誕叡大神之魂界杖】を掲げ、全軍に

【魔法】を付与する。

そうして何重にも強化された兵士達は勇気を奮い立たせて、恐るべき鬼達へと挑んでいった。

「戦いましょう、使命を果たす為に。戦いましょう、世界を救済する為に。【飽く無き暴食】と

【白き誕叡なる救世主】は、そう運命付けられているのだから」

真なる【聖戦】は、斯くして始まったのである。

朝から始まった戦闘は、夕方になっても続き、気がつけば夜になっていた。